

平家物語の一性格

——蘇武の説話から——

今 成 元 昭

はじめに

平家物語に数多く散在する説話の中には、他の文献に取められている同話とは別種の性格を付与されているものがある。これは一見奇異な事実であつて、平家物語が個人的な記録や閉鎖的な隨筆の類であるならばともかく、幅広い地域や階層の人々を享受対象とした語りものであることを前提として考えるならば、一般周知の説話の、いわば常識化したあり方（性格）をゆがめたまま維持しつづけることは殆ど出来そうにもないように思われるのである。にも拘らず、そのありうべくもないような事実が瞭然として存在しているということは、平家物語を創造し育成した人々の中に、敢てその説話の所有していた伝統的性格なり普遍的位相なりといったものを打ち破つて、新しい価値観のもとにその説話を位置づけようとする根強い志向が存在していたと考えざるを得ないのである。

右の予測に誤りがないならば、我々は平家物語において新しい性格を付与された説話と他の文献所収の同話とを比較検討するこ

とによつて、平家物語の一つの志向を、或は一つの性格を浮き彫りにすることが可能になる筈である。今少しく具体的に云うならば、平家物語の説話のあり方と先行文献所収の同話のあり方との懸隔から、我々は平家物語がまさに中世を担っているという文学史上の位相を解明しうるであらうし、又平家物語の説話と同時代文献所収の同話との相違によつて、我々は平家物語がまさに語りものであるという文学様式上の特質を探索しうるように思うのである。それらの意味において、ここに蘇武説話をとりあげ、その展開相を跡づけながら平家物語の性格に言及してみたいと思うのである。

一

平家物語の蘇武説話は諸本間に若干の相違はあるが、その説話としての性格は同一である。語り系平家物語（卷二蘇武、引用文は特にことわりのない限り古典文学大系本）によれば、漢武帝から胡国制庄のために派遣された大將軍蘇武は衆兵と共に生捕られ、片足を斬られて野に放たれるが「山にのぼつては木の実をひ

ろい、春の根芹を摘、秋は田づらのおち穂をひろひなどしてぞ、露の命を過し」て生き延び、やがて雁に文を托して故国に在所を知らせると、それが上林苑に御遊あった昭帝（武帝の子）の許に届き、遂に李広將軍らの援軍に救助されることになったのである。この李広という人物は、実は蘇武よりも前に胡国へ遠征して捕虜となった李陵の祖父であるので「平家物語の説話には時代錯誤がある」ことが指摘されているが、古態をとどめる屋体本には「此度へ百万騎ノ勢ヲ起テ胡国ヲ被攻ケリ」とのみあって將軍の名を記さず、また延慶本・長門本は永律という大將軍を遣わしたとし、源平盛衰記は援軍を派遣することなく「金銀の宝を遣して、蘇武を贖」ったとする等、何れにも李広は登場しないから後次の作者が誤り加えたものであることは明かである。

さて、平家物語における蘇武説話は、中国・日本をとわず、他の先行文獻に見える話と性格を著しく異にしている（除瑠玉集）。そのことを明確に把握するために、今は問題を雁書の事実性ということにしぼって展開することにしよう。平家物語の蘇武説話は、鹿谷事件の結果鬼界島に流された平康頼が「千本の卒都婆を作り」「せめては一本成共都へ伝えてたべ」と神仏に祈念して放流した「そのおもふ心や便りの風ともなりたりけむ、又神明仏陀もやをくらせ給ひけむ、千本の卒塔のなかに一本、安芸国嚴島の大明神の御まへの渚にうちあげ」、やがて都に届けられて清盛の心を動かし、遂に帰京することを得たという「ふしぎ」の先蹤談として挿入されているのであり「あまりにおもふ事はかくするしあるにや」という感嘆の語りとして存在価値を有しているのであ

る。であるから、平家物語の蘇武説話は、雁に結いつけた帛書が故国に届いたこと、そしてその事によって蘇武は帰郷することが出来たという、この事実こそが最も重要な挿入契機となっているわけである。右のことがらは、恐らくは平家物語生成の当初から不変のものであったと思われる。平家物語における蘇武説話の最初の形態をとどめていると考えられる源平闘諍録には

昔蘇武作五言詩止母恋 今康頼誦二首歌（慰）親思 彼雲上
此薄上 彼唐朝此我朝 和漢境雖異祖子契是同 遠近難阻配
流悲是也何々哀事也

とのみあって、説話と云いうる程のものは記されていないのであるが、それでも「彼雲上此薄上」等というあたりに、康頼の卒塔婆流しに対応する蘇武の雁書の件が事実としてふまえられていることが明かに知られ、私が本稿で問題にしている点については、屋代本以下の整った蘇武説話の性格と規を一にしているということができるのである。

ところが、今日では常識化しているところの、雁書の件を事実とする蘇武説話は日本では平家物語以前の文獻に見出すことができないのである。私の考えによれば、それは平家物語あたりの語りの世界で生成し流伝したものであらうと思うのであるが、もしそうだとすると蘇武説話の伝統的普遍的なあり方と平家物語における新性格とを検することによって、古代末期から強勢に泡立ち流伝していたもろもろの語りや、それを享けて生成した平家物語に作用く一つの強烈な志向と、その志向に基く一つの性格について明かにされることにならう。そこで次に、原典以来の蘇武説話

の位相を確かめてみようと思う。

二

蘇武の伝は漢書を原典とする。ややわずらわしいが本論の展開にとって必要であるのでその梗概を述べておこう。

漢武帝の代、胡国に遠征した蘇武は匈奴に捕えられ、単于に降伏を勧告されるが義を屈しない。又前に匈奴に降りた衛律からも再三投降を勧められるが、或は「屈節辱命雖生何面目以帰漢」と「引佩刀自刺、或は「女為人臣子、不顧恩義、畔主背親、為降虜於蛮夷、何以女為見」と律を罵って漢への「忠節」をつらぬくのである。その為に「大窖」（旧米粟之窖）中に置かれるが「絶不飲食、天雨雪、武臥齧雪与旃毛并咽之、数日不死」。そこで匈奴は「以為神」、蘇武を「北海無人処」に放ったので「武既至海上、廩食不至、掘野鼠去中实而食之」といった「辛苦」を重ねることになった。やがて漢武帝の子昭帝の代になり匈奴との和親が成立すると、漢は蘇武を求めたのであるが、匈奴は蘇武の死を偽り告げて之に応じない。漢の使者が再び匈奴を訪れた時、常恵に秘策を授かり「天子射上林中得雁、足有係帛書言武等在某沢中」と「智謀」の言を以て単于を責めると「単于視左右而驚、謝漢使曰、武等实在」という次第で蘇武は遂に救出されたのである。

右に述べたように、平家物語がそれをこそ説話挿入の契機とした雁書の事実は原典には存在せず、それは「智謀」による虚構にすぎないのである。また原典における蘇武の人間像は「忠節」を

つらぬく為に「辛苦」を重ねた凛々しい武将のそれであって、蒙求が「蘇武持節」の題のもとに蘇武伝を記述していることよって象徴されるように、中国の蘇武伝は「忠節」「辛苦」「智謀」という漢書に存したモチーフを一貫して継承しているといえる。只一つ瑠玉集だけは雁書の件を事実とし、その他にも漢書の伝とは非常に違った蘇武説話を掲載していて特異な立場にあるが、この書については後に触れることにする。

日本において伝承された蘇武説話も亦、漢書から正當に摘出される三つのモチーフによって支えられていた。それらのモチーフは、時には単独で、時には組み合わせられて説話を構成しているのであるが、今主たるモチーフによって日本の蘇武説話を分類すると次のようになる。

I 「辛苦」をモチーフとするもの。

注好選集は見出しも「蘇武鶴髮」（第七十一）であり

此武者、漢帝人也。為皇ノ所使ト征胡塞へ。十六奉勅卅四帰朝。郎十九年ノ転蓬ニ髮白如鶴頭乎。

と専ら転蓬の生活を記している。「鶴髮」は蒙求が「及還鬚髮尽白」と記し、日本でも東大寺諷誦文稿が「蘇武カ行シ、胡地ニ皓首而來国」と云う所と規を一にする「辛苦」の象徴である。

日蓮は自分の経験した北国佐渡の配流の生活や、深山身延の隠棲の「辛苦」を記すに当って蘇武を引例し、例えば

「彼の蘇武が十九年間胡国に留られて雪を食し、李陵が嶽窟に入て六年裘をきてすごしけるも我身の上なりき」

といった文句を六通の書簡に留めている。日蓮が「彼の蘇武が：

…』という「彼の」の語は、日本の蘇武説話が「辛苦」 ∇ というモチーフと深くかかわっていたことを語って余りあるものと云えよう。

II ∇ 忠節 ∇ をモチーフとするもの。

十訓抄がその第六「可存忠直事」の例として蘇武を掲げ、

蘇武は麒麟閣の功臣なり。塞垣にとらはれて十九年、つゝに漢の節を失はず。

と専ら「節を失は」なかつた「功臣」として蘇武を称揚しているところに ∇ 忠節 ∇ をモチーフとする話の典型を見ることが出来る。

蒙求を典拠とする蒙求和歌(第三)が「蘇武持節雁」を見出しとして蘇武説話を採録していることまた当然である。

III ∇ 智謀 ∇ をモチーフとするもの。

今昔物語の蘇武説話は ∇ 辛苦 ∇ や ∇ 忠節 ∇ をつらぬく蘇武を全く記さず、胡国に行った使者(衛律とする)の ∇ 智謀 ∇ を語るのみである。そして末又、

然レバ、虚事ナレドモ事ニ随テ可云キ也ケリ。衛律ガ謀ノ言ハ賢カリケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

と明記しているところを見ると、蘇武伝の ∇ 智謀 ∇ 部分に専ら興味を燃やした説話が「語り伝へ」られていたと判断できるのである。後に問題とするが「宝物集」(一卷本)でも「俊秘抄」でも雁書の件は「はかりごと」としてきめつけられていることも見逃すわけにはゆかない。

三

平家物語生成以前、或は同時代の諸文献に見られる蘇武説話の三つのモチーフのうち ∇ 辛苦 ∇ については平家物語の場合にも該当するものがあるが、 ∇ 忠節 ∇ と ∇ 智謀 ∇ とは平家物語の全く採らざるところであった。それもその筈、 ∇ 忠節 ∇ / ∇ 智謀 ∇ の二モチーフは、平家物語の意図した蘇武説話の性格を裏切るといふ点で密接な関連性を有するものである。前述したように平家物語の蘇武説話は、平康頼の帰郷談の先蹤説話として存在価値を有している。そしてその挿入契機は康頼の卒塔婆流しに対応する蘇武の雁書という事実なのである。であるから雁書の件は ∇ 智謀 ∇ による虚構であることは絶対に許されない。と同時に、雁書を実現した蘇武は、康頼と同じく一途に故郷に憧がれ、望郷の執念に生きる情的な人間でなければ意味がないのであって、 ∇ 忠節 ∇ の操堅い勇将の面影は払拭しなければならぬのが平家物語の立場であった。こうして平家物語は極めて特異な蘇武説話を育て上げたのであるが、恐らくは一般の普遍的であったところの、忠節者蘇武の人間像や雁書の智謀の伝承を、全くうらはらの相のもとに定位させている平家物語の事実は瞠目に価するものであり、そこに作用したエネルギーは、はかり知れない程の強烈な志向に基づくものであったと考えざるを得ないのである。

ここで私は、右のような志向が如何なるものであったかを考究する前に、一歩立ち止って、上米の論旨に疑義を投ずるであらう。一二の問題について説明しておかなければならない。その第一

は、例えば

秋風に初雁がねぞ聞ゆたるが玉梓をかけて来つらむ。

(紀友則)⁽⁶⁾

帰る雁西へ行せばたまつさに思ふことをば書きつけてまし。

(運寂)⁽⁷⁾

等の歌があること、或は「蘇武持節」とは名うつていても蒙求和歌(第三)が、

(蘇武が)イマタアリトハカリタニモ、フルサト人ニキカレハカト思カヒナシ。アキノソラムカヘテ、宮コノカタヘユク鷹ノアシニ、フミラムスヒツケテケリ、鷹南ヲサシテトヒサリヌ。帝上林苑ニアソヒタマフヲリシモ、資鷹書ヲカケテイタレリ、(中略)

ヘタテコシ都ノ秋ニアハマシキ越路ノ鷹ノシルヘナラスハと明かに雁書の件を事実として認めていること等を以て、古くからそのような伝承が存在していたのではないかという疑義についてである。ここで問題になるのは、右の疑義を生起させる資料が歌の世界のものに限られていることである。歌の世界というのは独特なものであって、作者の想像力の限らない飛翔が許される。個々の歌は、作者の独自の歌心によって打立てられた金字塔であって、たとえ類似が認められたとしても、各作品と作品との間には、いわば点と点との関係における断絶が存するのである。この点、享受したことがらを、事実として、事実らしく伝承するという説話語りの世界、同話類話の間には線の連繋の存する世界とは本質的に異つたものをもっている。従つて、和歌世界にのみ雁

書の事実性をうたった作品があつたとしても、それによつてそのような伝承があつたとは云えない。むしろ説話・記伝類を資料として否定する方が真に近い——ということが論理的に云えるのである。それだけではない、雁書の件については右の論理をはっきりと裏づける資料さえ存するのである。俊秘抄の語るところに耳を傾けよう。

秋風に初雁がねぞ聞ゆなるが玉梓をかけて来つらむ

此歌は……(昭帝が雁書によつて)蘇武いまにありとはしるしめしたりと、はかりごとをなしていひければ、しかさるにてはやくなしと思ひて、まことにはありといひてあはせけるといへり。それによそへてかう雁の歌はよむなり。(傍点引用者)

ここに述べられた蘇武の故事は漢書直伝のものであり、文章まで漢書の逐語訳である。つまり雁書を詠む知識人たちも、それが原典以来の「はかりごと」であることを充分承知の上でロマンチックな連想の遊びを楽しんでいるにすぎないのである。

第二の疑義は瑠玉集の記録によつてもたらされる。六朝末の撰録と考えられる瑠玉集には、

(蘇武が)仰天歎曰北来之鷹南往之鳥有過我故郷者也天感其意二鷹落於石穴武作書繼鷹頭飛至長安漢帝殿述其書始知蘇武不死遣使甘人實金讀之其使未達武已走還也出前漢書

とあって、わざわざ「出前漢書」とことわっているにも拘らず漢書とは非常に異つた話を記載し、雁書の件も之を事実としているのである。瑠玉集の日本渡来は甚だ古く、現存写本の書写年次が

天平十九年であるし、万葉集歌の資料ともなり、又政事要略・和漢朗詠集私注(覚明)・三教指帰の注などに引かれている書であるから、瑠玉集に基づく蘇武雁書の説話が古くから一部で伝承されていたのではないかとも思われるのである。然し、縷々述べて来たように、平家物語生成期以前の文献にその残滓も見出すことができないということは、雁書の件を事実らしく和歌に詠みながらも尚その否なることを充分に存知していた状況と全く同じく、瑠玉集の蘇武説話の存在は知りつつも、貴族知識層の間では漢書(及びその伝を正當に継承している諸書)による伝承の權威が絶大であつて、それと著しくかけはなれた説話は誤伝として齒牙にもかけられなかつたためであると推断されるのである。この推断に誤りがないならば、瑠玉集蘇武説話の存在は、却つて逆に原典直系の蘇武説話の根強さを裏づけることになるわけであつて、ここに愈々平家物語あたりにおける改変の意味あい注目されてくるのである。

四

私は雁書の実否にこだわつて論を進めて来たようであるが、それは典型的な事象として扱えたまでであつて、実は主人公の人間像が△持節不屈の勇者▽から△望郷恩愛の情者▽へ転換するといふ説話の性格そのものの変貌が問題なのである。再言するならば、雁書の件を事実とする蘇武説話の重要なモチーフは、故郷や親に対する△恩愛▽の情であつて、雁書という奇瑞は△恩愛▽の概念に対する△神格者の感応として顕現することになるのであり、

伝統的な蘇武説話とはうらはらな性格のものに改変されている。そしてその改変は人間的な恩愛の情の切実さを確認する心に支えられていることが強調されなければならないのである。

ところで平家物語が享受者と共にあるべき語りものであることを前提として考えるならば、作者の意志が如何に強烈であつたとしても、伝統的普遍的な説話を根底から改変するなどということはできうる筈のないことであつて、その改変が許されているといふことは、幅広い地域や階層の享受者達がその意味における作者との精神的連帯者であつたことに外ならない。直言すれば、恩愛の情の切実さをうたい上げる心は一つの△時代の心▽であつた筈なのである。このことは燕丹説話の展開とその平家物語における位相を検討することによつても証しうる。燕丹説話については別に一稿を草するつもりであるのでここに詳述することはさけるが、秦始皇帝に捕えられた燕丹が帰国を希望する理由一事をあげても、原典史記が「秦王之遇燕丹不善」と秦皇の待遇に対する不満を以てその理由として以来、燕丹子伝・瑠玉集・史記正義(何れも「秦王遇無礼」)を経て十八史略に至つても「秦王政不礼」と一貫して不変であるのに反し、日本中世では「(丹)反ラムト思ヘドモ、反ル事ヲ得ズシテ父母ヲ見ル事无シ。此レニ依テ、燕丹父母ヲ恋悲テ、国ニ反ラム事ヲ請フニ更ニ許サズ。而ニ猶泣キ悲ムデ、反ラム事ヲ請フ(中略)然レバ燕丹、思ヒノ如ク、旧キ郷ニ返テ、父母ヲ見テ悲喜ビケリ」(今昔物語)といふように恩愛の情をその理由としているのである。平家物語はその最も古朴な姿を留めている屋代本にあつても「燕丹涙ヲ流シ我

国ニ老母有暫ノイトマヲ給テ彼ヲ見シ」と恩愛談としての傾向を明かにし、後の諸書には屋代本に存在しなかった「孝子への鳥報恩談」を付加してその傾向を飛躍的に強めているのであるが、平家物語の組織構成上から見れば全く無理な説話挿入であるという所に、平家物語のこの種の説話に対する執着の強さを指摘しうるのである。

さてそれでは、恩愛の切実さを認めるのが八時代の心¹¹²であったとして、その心の具象が何故平家物語において急激に強烈に現われているのであろうか。具体的には蘇武説話の雁書の件が何故平家物語においてはじめて事実として定着し得たのであろうか。その理由を私は、平家物語が古代末期から渦巻き流れていた現実の語りを母胎として生成し、現場の語り物として磨きかけられていったという事情によるものであると考えるのであるが、平家物語に隣接する作品における蘇武説話の変化相によってそれを証明してみよう。

宝物集には蘇武の故事が引用されているが、

アへ仲丸モロコシニ侍ケルトキ、故京ヲオモヒイテ、月ノアカリケル夜

アマノハラフリサケミレハカスカナルミカサノ山ニイテシ月カモ

トヨミ、蘇武之胡ニアリシ時、雁之足ニ文ヲツケタリトイフ、ハカリゴトシケルホトニ……

と記す一巻本では雁書の件が「ハカリゴト」とされている。本書は望郷者の代表として本朝の阿部仲麿と漢土の蘇武とを対比して

いるが、この発想法は平家物語生成以前の伝統的発想法であり、平家物語関係の鬼界島流人の悲話・平康頼の哀話が当時の人々の心を把えて盛に流伝するようになる¹¹²と、仲麿談は色あせて駆逐され、漢土の蘇武に対するに本朝の康頼というペアが発想されるようになったと思われ¹¹²るのであるが、そのような新発想に基く宝物集の三巻本が、

蘇武ガ胡国ニ罷リテ十九年迄帰ラサリケンモ、都恋シク侍ケンカシ。漢王林苑ト云所ニテ遊ヒ給ヒケルニ、鴈ノカシラニ文ヲ著テアリケルヲ見給ケレハ、蘇武カコトツケ也ケリ。其時蘇武ハ未イキタリケルト思召テメン帰サレケル。

と、雁書の件を明かに事実として記していることは注目に価する。佐々木八郎博士も宝物集の一巻本は平家物語と関係なく、三巻本にはそれとの交渉が認められるとされているが、¹¹³宝物集蘇武説話の一巻本から三巻本への改変には平家物語の（或はそれと密接な関係にある）語りの力が作用したとしか考えられない。宝物集三巻本の成立が非常に古いと仮定して、そこで改変された説話が平家物語側に影響を与えたのではないかという推測が無理であることは、前に考えたように伝統墨守癖のある貴族知識層間では瑠玉集の存在が無視され漢書直系の蘇武説話のみが尊重されていたという事情によっても明かである。伝統的普遍的知識の変革には下からのつき上げが必要であり、下からのつき上げは現場の語りを媒介としなければならなかった筈なのである。

次に保元物語の場合をみよう。「最も原初の本文の形式・内容を伝えていると考えられ¹¹⁴」る半井本は、讃岐に配流の身をかこた

れる崇徳院の心情を述べたるに當つて、

何ナル罪ノ報ニテ遠キ嶋ニ被放テ、カ、ル住ヲスムラム。馬
ニ角生、烏ノ頭ノ白ナラム事モ難ケレバ、帰ルベキ其年月ヲ
不知、外土ノ悲ニ堪ズ、望郷ノ鬼トコソ成ソズラメ。

と記している。「馬ニ角生、烏ノ頭ノ白」くなるというのは云うまでもなく燕丹が秦始皇帝の難題を神明に祈願して現わした奇瑞であつて、本朝文学にも将門記以来屢々引用されている有名な故事である。この同じ部分を金刀比羅宮本に徴すると、

いかなる罪の酬にて、遠島に放て、かゝる思ひに沈むらむ。

境南北にあらざれば、雁のつばさに文をかけ、思ひをのぶる
わざもなく、陰陽の変を分けざれば、烏の頭の白くなり、馬
に角のおいんずる其期もいつとしりがたし。只懐土の思ひ絶
えずして、望郷の鬼とぞならんずらん。

とあり、蘇武の雁書が記されている。雁書と白鳥馬角とは望郷の
概念が神格者の感応を得て現出した恰好な先蹤であり、せつかく
ペアで配された故事の一方を後次の作者が切り捨ててゐることは全く
考えられないから、やはり半井本の記述の方が古態であり、雁書
の件を事実とする説話を知らないか或は知つていてもそれに抵抗
を感じる頃の知識層の作者によつて記されたものであらうと思わ
れる。他方金刀本の方は七五調を混えた流麗な章句も語り、との密
接な関係を偲ばせ、平家物語周辺で変質し盛に流伝した蘇武説話
との関連のもとに増補されたものであらうと思われるのである。

さて今日我々の見る文獻上では、蘇武説話の改変は平家物語
によることになるが、果して平家物語作者が康頼卒塔婆流しとの

対応のために改変したものであるか、或は平家物語生成以前にそ
のような改変を遂げた説話が存在していたかは據に断定できない
ところである。私が改変の場を平家物語あたりと云い或は周辺と
わざわざ記してきたのはそのような事情によるのであるが、一つ
の憶測が許されるならば、平家物語生成以前の語りの中に、既に
ほそほそではあつたかも知れないが八時代の心Vを享けた蘇武
説話の新性格が形成されていたのではないかと思う。日蓮の書簡
に、

あの蘇武が胡国に十九年、ふるさとの妻と子とのこひしざ
に、雁の足につけしふみ。安部中麻呂が漢土にて日本へかへ
されざりし時、東よりいでし月をみて、あのかすがの月よ
とながめしも、身にあたりてこそおはすらめ。

という一節があるが、ここに見られる発想は仲麿—蘇武の対比か
ら平家物語生成以前のそれであることが明かであり、而も雁書を
事実と認めているところを見ると雁書は必ずしも康頼の卒塔婆と
の対比を条件としていたものではなかつたらしい。

もし、平家物語以前に新性格の蘇武説話が形成されていたかも
知れないという憶測が當つていたとしても平家物語の偉大さには
変りがない。説話として流伝していた新蘇武談を文学の中に立派
に定位置させたものが平家物語であることに違ひはないのである。
平家物語を形成した知識人は、知識層間における伝統的普遍的な
説話のあり方を眼中に置かない見識を有していたと云える。平家
物語の作者は、現場の語りとの密度の濃い接触から、恩愛へ志向
する八時代の心Vを洞察し、その洞察に基く信念によつて一見奇

異と感ぜられるような文学營爲を敢てしているのであって、平家物語の蘇武説話はそのような營爲の所産であつたればこそ、享受者達の反撥を誘うどころか、自らを愈々豊かに成長させ、又伝統的な他の説話の体制をも崩壊させる力を持ち得たのであらうと思ふ。

おわりに

当時既に普遍的になつていた同話と、質的に隔絶した平家物語の蘇武説話のあり方は、伝統的知識層的精神構造からは到底生起し得ない態のものであつて、非伝統的新興階層をも含めた広い場の語りが、中央の術学的伝承の世界をつきくずした事例として注目すべきであらう。そして中世初頭の国民的な心が、如何に恩愛への志向を強烈に抱いていたかを知つてだてとなるであらう。

平家物語の第一次的作者は、幅広い語りとの出会いによって洞察した、恩愛に賭ける八時代の心 \checkmark を平家物語創造の重要なモチーフとしており、第二次以降の作者達も、幅広い語り世界へ働きかけるべき平家物語の成長の為に、頭初のモチーフを愈々豊かに生かし続けているという所に、平家物語の、中世文学としての、語り物語としての一性格を指摘し得ると思う。

平家物語には恩愛場面の叙述が多くあるが、それが屢々王朝的情趣味を堪えているので、その表面的姿相によって之を古代性に繋るものとする論を目にする。しかし私は、平家物語の恩愛観は、そのような皮相な判断の遠く及ばない深みにおいて人間を把えたものであると思つている。それは古代末動亂期を真正面から

うけとめて生きぬいてゆこうとする人々が、古代的な関係における人と社会との行詰りを打開すべく、今一度人間を個々の存在に分解し、生存の根源にまでほりさげてみた上で、最後に抛るべきものとして把え得た尊い人間連帯の思想ではなかつたか。この、人間と人間との関係を決定する最も根源的なものとして恩愛を見出すという生活的覚醒は、そのまま世間的広場へ出れば、親鸞の「親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念仏まふしたることいまださふらはず。そのゆへは一切有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」¹⁷⁾・道元の「恩愛ヲアハレムベクハ、恩愛ヲアハレムベシ。恩愛ヲアハレムトイフハ、恩愛ヲナゲスツルナリ」¹⁸⁾といった中世仏教の思想に止揚されるべきものを蔵しているという、精神的な把え方の上に立つた展望も平家物語解明の一つの鍵になつて思ふ。

註(1) 岩波・古典文学大系の註。

(2) 漢書五十四、李広蘇建伝第二十四。

(3) 引用文は法蓮鈔。他に国府尼御前御返事・单衣抄・妙法比丘尼御返事・松野殿御家尼御前御返事・法華本門宗要抄。

(4) 今昔物語集卷第十、漢武帝蘇武ヲ遣胡塞語第三十。

(5) 読本系には「漢の節を失はず」等といった八忠臣 \checkmark の残滓があるが、それも力弱いものである。

(6) 古今集四、秋上。

(7) 詞花集十、雑下。

(8) 近藤至、支那学芸大辞典。

(9) 名古屋真福寺宝生院伝本、第十二・第十四兩卷。

(10) 史記八十六、刺客列伝第二十六判軀伝。

- (1) 今昔物語集卷第十、燕丹令生馬角語卅九。
- (2) 拙稿、日蓮遺文と平家物語、国文学研究第二十五集。
- (3) 平家物語講説九七頁。
- (4) 岩波、古典文学大系本解説。
- (5) 保元物語下、新院御経沈めの事付けたり崩御の事。
- (6) 妙心尼御前御返事。
- (7) 歎異抄。
- (8) 正法眼蔵、行事。

(本稿は昭和三十八年五月二十三日説話文学会大会における発表「平家物語と蘇武・丹の説話」の一部を整理したものである。)